市民の皆さんと 新春座談会

「阿蘇で暮らす」～人やすらぐ、住みよいまちづくりへの提案～

阿蘇市市政モニター＆佐藤市長

市政や地域社会について活動する市政モニターの皆さんに、昨年は「地域コミュニティと住みよいまち」というテーマについて考えていただきました。これは、人々が「阿蘇に住んでよかった」と思えるまちにすることが、安心・安全な暮らしと地域経済の発展につながるとし、そのために『市民一人ひとりが出来ること』『人と人とのつながりを高めること』を見出そうと話し合いを進めてきました。第５回市政モニター会議では、これまでをまとめ話し合いましたので内容をご紹介します。

出席者（市政モニターから７人）
吉田俊一さん（町２区）
荒木博子さん（内牧５区）
山崎武文さん（乙姫）
古庄志保さん（大道）
村上多志子さん（小里）
西岡ヤス子さん（元黒川）
杉本美保さん（町１区）
佐藤義興阿蘇市長

市長…この阿蘇市には、生まれた時からずっとここに住んでおられる方、また結婚を機にこちらに住むようになられた方、Ｉターン、Ｕターンの方、いろんなきっかけで阿蘇市の住人となっておられます。その皆さんがうまく溶け合い、心から住みよいと思えるまちをつくっていくにはどうしていったらいいのか、改めて意見を交わしたいと思います。

Q 阿蘇市に住むようになって現在の感想。定住化に必要な条件とは何か？

荒木…私は結婚を機に20年前に内牧に来ました。来てすぐの印象は、歩いてすぐの距離に役場や銀行、郵便局があり、こじんまりしたまちで便利でいい所だなと思いました。最近仕事でよそのまちに行く機会が多くなってわかったのですが、阿蘇市にはずいぶん早くから大きな図書館とか下水道、証明書自動交付機などの整備が行われていたんですね、すごいことだなと感じています。

杉本…私は宮崎から10年前にこちらに来ました。宮崎もそんな街中の方ではなかったのですが、公園が家の周りに５ヶ所くらいありました。こっちに帰って来たら、スベリ台をさせるにもブランコに乗せるにも何もなくて、私も子どももストレスが溜まりました。保育園や小学校のブランコには通ってないのでなかなか校庭に入れなくて、早く公園が出来ないかな、一つくらいあってもいいよなって思ってきました。市が安全面も遊具もしっかり管理した安心できる公園があればなと今でも思っています。

古庄…私は主人が阿蘇の景観や自然にすごく惚れ、どうしてもこちらに住みたいということで奈良から来ましたが、最初はやはりちょっと病院のことで心配がありました。波野に住んでいますが、出産がどうなるんだろうと。病院まで車で30分もかかると聞いて、すごく悩みました。

予防接種も奈良と違って実施回数が少なく不安に思いましたが、今思えばあわてて接種することもなかったんです。今はこちらに来て最高に満足しています。ずっとここにいたいなんて思っています。

市長：住んでいる私たちが通常の生活に慣れ、当たり前に思っていることで大事なところを見逃し、そこを指摘されているような気がします。子育てをするのに公園はいろんな意味で必要ですし、定住化ということになるとやはり大事なことは福祉の面で、医療や福祉の充実、そして教育環境をいかにつくっていくか。こういったものが整った地域が誰もが住みたくなるまちではないかなと思いますので、もっと行政も整備に取り組み、より便利な環境をつくっていかねばならないと思います。

吉田俊一さん

吉田…私は退職後にこちらへ帰って来まして、ちょうどその年に合併して阿蘇市ができました。その中で感じたのが、それぞれ地域で集落はあるけどその間のつながりがあまりできてないということです。ですからいろんな活動をしてもなかなか人が集まらない。人口が減少しているせいもあるので、

コンパクトシティづくりから始めよう！

その辺りをどう活性化させていくか。その一つがコンパクトシティづくりではなかろうかと思います。コンパクトシティとは、住民が生活する中で、行き来ができる、人と人とのつながりを大事にしたまちづくりで、例えば、新しく地域に入ってきた人の受け入れを、排他的な意識を抱かせないように新しい住民を迎え、その中でいろんなイベントを通じて同じ生活者としての付き合いをする。そういった小さなコミュニティをどんどん大きくしてコンパクトシティにしていく。また、商店街が活性化しないとコンパクトシティにはなりません。

一の宮では仲町商店街が非常によいコミュニティをつくって活性化を図っていますし、内牧の方でも、商店街の活性化が行われています。そういうのを進めていくことによって、近くの住民が定住化してくる、そうして新しいまちづくりが出来る。その根底にあるのが人と人との付き合いです。人と人とのつながりをよくするには、地域でのイベント、祭り、そういったものを大事にして、大人から子どもまで全員参加の活動をやっていくことが必要です。我々が一つのつながりを持ってつくっていかなければならないと思います。

市長…コンパクトシティづくりというのは、人とのつながりが大事であり、商店街の中で顔の知った人たちがより交流をし合う、知らない人でもさりげなく挨拶をするという温かみのある交流を目指していかなければならないでしょう。地域をつくるというのは、それぞれの地域の方々が一番よくわかっておられますから、そこから結束が生まれ、より発展していくのではないかと思います。

山崎武文さん

山崎…こっちへ来て23年になります。以前はサラリーマンで、いくつかの県庁所在地にいたのですが、地域の組織で自治会という呼び方はあるけれど、区という呼び方はなくて、区という制度がなんだかわからないのに転入したら役場からいきなり区長さんの所へ行くように言われたことを覚えています。

定住化の問題に関しても、家の情報を欲しがっている外部の人た

阿蘇市の魅力にもっとカルチャーが必要

ちのために、市の嘱託職員でもあり、現状に詳しい区長さんに空き部屋を把握してもらい、その情報を発信してもらえるとありがたいですね。

合併した時から人口はどんどん目減りし、今後増える希望は残念ながら今のところありませんよね。

他の地方では移住者の多い町村もあり、そのノウハウや医療費の拡大に関する対策などのレクチャーを受けるのもいいのではないかと思います。まずは、外部の方が移住して来られることを地元の方々はどう思われ、どう受け入れるのかも大切。移住して来られる方々は様々なものを求めてやって来られます。それと同時に、色々な刺激を持ち込んでくれるという事もあります。技術や芸術、何より新鮮な人間関係です。

その為には、魅力的な阿蘇を作っていくことが重要になるわけですが、率先して阿蘇市を考えるべき市職員が阿蘇市外から通勤して来る事実を、どう理解するか。教育問題だけにはとどまらないものを感じるのです。わくわくと、活気のある人間関係は阿蘇の大人にも子どもにも良い刺激を運んでくれると期待するのですが。

市長…確かに刺激がないということは将来において一つの夢をなかなか描くことができないという意味にも取れるなと思いました。若い人たちも熊本市内や光の森に遊びにいくのは、そこになんらかの刺激があるから行くわけで、そういうものを兼ね備えたものを阿蘇市内にもつくっていく必要があります。住民の皆さんとよく話し合いながら、人が集まってくる魅力ある地域づくり、学校の誘致等について、更に取り組んでいきたいと思います。人口の減少問題にしても、やはり働く場所がないから外に出て行かざるを得ないという原因も大きいので、行政も働く場所の確保については懸命にやっているところです。

西岡ヤス子さん

西岡…私が阿蘇に帰ってきたのは14年前です。外に出てみて阿蘇の素晴らしさ、住み良さを感じています。山崎さんが阿蘇には刺激があまりないと言われましたが、私たちの若い頃は映画館が内牧・宮地・坊中にあり外に行かなくてもここで遊べました。これら刺激するものが無くなったのも高齢化が進んだ結果と思いますので、若い人をどう定住させていくかということが一番大事なことだと思います。

若い人たちをどうにか定住させたい

　また、転入者の受け入れについても、アパート等の経営者、あるいは区でもいいですから、阿蘇の良さ、地域の良さを盛り込んだマニュアルなんかを作り、新しい住人の方にあなたの地域はこういうところなんですよと教えてほしい。地域に早く溶け込むためにお互いにコミュニケーションが必要です。

　私は婦人会などいろんなことによそから来た人たちを引っ張り出しています。お姑さんと一緒にいるとストレスが溜まりますから話を聞いてあげたり、いろんなことを教えてあげたり。環境が変わったところに溶け込むことは難しいので新しく来た人たちとより接点を持ちながら活動していくことを大切にしています。新しく来た人たちも自分からも隣近所とのコミュニケーションを取り、緊急なことがあった時は、一番に飛んでいくような関係をつくっていかなければ。

村上…私の地区には個人経営のアパートがいっぱいあります。まずはこの経営者の人たちを引っ張り込んで、老人会、婦人会、子ども会に入りませんかとお誘いしています。

新しく来た人たちとより接点を持つ・知り合う

　現在、小里では区長さん方が協力して村づくりを始めています。内牧校区でつくられたお年寄りたちによる子どもを守ろう会では、10月の一ヶ月間お年寄りが子どもたちの下校を見守りました。寒い中ずっと立っておられたわけですが、すると子どもたちもタスキをしたおじいちゃんおばあちゃんに「ありがとうございます」と言い始めたのです。お年寄りたちは自分たちが立てば子どもたちも挨拶をするようになったと喜ばれました。まずは地区から始めてそれから町へと広がる、地区が一つにならないと町も一つにならないと思います。

村上多志子さん

　また、刺激の話ですが、うちは都市と農村交流事業で都会の修学旅行生を受け入れています。都会の子は、ただ田んぼを見るだけで刺激、カエルがいる蝶がいる、真っ暗に電灯1本が刺激。都会の子どもからすれば阿蘇の田舎は刺激的なところですから阿蘇は今からだと思います。

佐藤市長

市長…都会と田舎はライフスタイルが全く違います。都会の方は交通の便もいいし人口が密集しているから学校も買い物先も近くにあります。しかし近隣の方々が、何をしているのかさっぱりわからない。お互いに干渉しなくて、お隣がお亡くなりになったのすらわからないこともあるそういう生活なのです。

　田舎では足らない部分をお互い隣近所の人がフォローをする、子どもの見守りをしてあげるなどそういう良さがあります。大事なものは何か、物事を整理して考えていきましょう。

Q住みよいまちのため、私たちにできることは？

吉田…定住化するためには人間関係とか、刺激があるもの、カルチャーなど、まず私たちは具体的にそれらを進めていかなくてはならないでしょう。村には精神的な遺産、物理的な遺産があります。先日韓国の子どもたちのステージを一の宮中学校に聞きに行ったのですが

非常に清々しい。ああいう文化があると外にも出していけるわけですね、そういった地場の文化を発信することによって持続性ある地域の活性ができる。区長制度を大いに利用してリーダーシップをとる人を何人か集めて、そういう動きをしていく。そうすることによって、住みよいまちにすることが大事だと思います。

山崎…先人の知恵や過去から伝承されているものを大切にする意味も含めて、お年寄りをもっと大事にするまちづくりが大事では。確かに国立公園ということで開発を制限されてきた面で産業が根付けない理由もあると思うのですが、農地、原野を守ってきたのは先人なので、その先人を大事にしていきたいですね。今健康づくり教室が盛んに行われていますが、私の母も帰って来ると楽しかったと言います。お年寄りには家から離れられない方、送迎がなければ行けない方などたくさんいらっしゃるので、もっと家から引っ張り出す、日光に当てて、花に水をやる思いで、引きこもっている方を引っ張り出す。もっとお年寄りへのフォローをしてもいいのではないかと思います。

市長…お年寄りを大切に思う気持ちは誰もが感じる共通の思いです。今後、多くの人が参加したくなるような事業をもっと展開していく必要があると思います。どんな事業においても関心を持ってもらえるようなことを取り入れていかないと参加者は増えません。一律皆参加ということは難しいですが工夫をしながら進化していく。例えば仲町の夏祭りナンバーズは多くの方が関心があるからたくさん来るわけで、そういったものをこつこつと作り上げながら地域のコミュニティを作っていかなければならない。カルチャーが一番大事ではないかと思います。

荒木博子さん

荒木…結婚してすぐ、地域で祭りやお葬式の加勢の際「今度からあんたが一番若いとだけん、なんでん一番にせなん」とか言われ、カチンと来た覚えがありますが、子どもが育つにつれお互い助け合わないと生きていけないとわかってからは受け入れられるようになりました。なので引っ越してすぐ区に入ってくださいと言っても受け入れられないのが本音ではないかなと思います。私もだけど、ほとんどの人が関心があることには参加するけど、そうでないことには参加しない。それが本音なのでこれをどうまちが受け入れ、発展していくかは、どのまちも抱えている大きな課題だと思います。私の場合は、市や青少年交流の家が行う行事やイベントが年間にいくつもありますが、それに行くようにしています。いろんな催しに参加するとじわじわといろんなことがわかってくるので、じわじわ浸透するため、主催する人たちはたくさん声を掛け合って参加を募るのが基本と思います。チラシだけ学校とかで配っても来てくれない。継続も力だし一人ひとりの声掛けがまちの小さな発展につながるかなと20年暮らした今思います。

人と人とのつながりで阿蘇市が好きに

杉本…うちの地区は児童数が少ないのでPTAなどの役を1年生の時からしていて、上級生のお母さんに教えてもらいながらやっていくうちにつながりができました。これがこちらへ来て第一番目の深い人とのつながりであったと思ったですね、新しい関係に出会えたことに感謝しています。

私の住む仲町はすごくご近所の仲がいいんです。いつも吉田さんが登下校の安全確保協力ボランティアの巡回を犬のベリー君とされていて、皆さんに挨拶されて、子どもたちがベリー君をさわって…それがいつものまちの風景なんです。新しく来られた方も、自分がどういうことから少しずつ馴染んでいけるのかを考え、それに気づいて欲しい。私も10年経って、今、あれが良かったんだなって思えるようになりました。

杉本美保さん

新しい出会いに感謝。声を掛けてくれて感謝。

古庄…こっち来て、言葉の違いや地域のしきたりに戸惑いましたが、いつも挨拶をしてくださる方がいて、おはようございます、こんにちは、の挨拶から言葉を交わすようになり、こちらが好きになりました。ただ田舎だなと思ったのは祭りなどで女の人はみんな裏方で給仕。男の人は飲んでいるだけで、コップ出してお酒がないよ！って言われて、主人でもないのになんでこんなこと言われなあかんのやろと思いました。しかし何度かお祭りに参加しているうちに男の人は力仕事をちゃんとしてくださってますし、男性と女性でちゃんと役割分担ができていることがわかりま

した。今は家族で祭りを楽しんでいます。また、私も保育園で人のつながりができました。それまで家にこもりっぱなしでいて、周りのことがわからないから外へ出るのが怖かったんです。地域の方、保育園の先生、皆さんから声を掛けてもらえたのが本当に一番よかったです。

西岡…よそから来た人は言葉の違いにびっくりしますよね。怒っているみたいに聞こえるようで。うちの区は移住してきた人が次の年の隣保班長になります。地区のことがわからなくても隣保班長になり、聞きながらでも覚えることで、わからないことの解消になる。転入者もずっと住んでいる人もお互い感謝の気持ちを交わし気持ちが通じるようになったらそれが一番です。阿蘇市が和気あいあいとしていくようなまりづくりをしましょう。

古庄志保さん

村上…うちにもお嫁さんが来て姑の立場になりました。3人の話を聞いて、うちのお嫁さんもそう思ってるんだろうなと思いました。だから子育て支援センターとかのように若いお母さん同士気軽に話せる場があるのはとても良いことだと思います。

小里では交流を図るため行事がいくつもあります。今年からラジオ体操をみんなでしています。子どもだけの時はダラダラしていたのですが、お年寄りが汗を流して一生懸命体操している姿を見て子どもたちも一生懸命やっています。とてもいい光景です。また、今年初めて小里だけの文化祭をしました。習字が上手な人、手芸が上手い人、いろんな方に声を掛けましたら50点くらい作品が集まりました。ぜんざいとおにぎりなど作って、踊りなども披露しました。行事に参加するうち、あの人は誰だということがわかって地域に愛着が生まれています。

笑顔の挨拶があふれる町へ

市長…元気なまちづくりの基本となることでこうして皆さんの話を聞いて思ったのですが、やはり「挨拶」から始まるのではないかと。それも笑顔の伴った挨拶ですね。これを繰り返すことで、お互いに心が開けてきて、少しずつ会話が始まり会話が続くようになってくるのではないかなと思います。

移住して来た人たちにも地域のルールはこういうものがありますというのを、きちんと説明するか、あるいは祭りなどが終わった後に実はこうしたことで私たちは祭りを守っていますと、その後のアフターケアといいますかそういった部分を丁寧に話すことが必要だと思います。

それと、確かに地域にはいろんなしきたりがあります。このしきたりには反面束縛をされるような理解のしがたいしきたりもあるかもしれません。けれど前向きによく話し合いをしていけば理解をしていただけるのではないと思います。そこがひとつの分水嶺ではないかと感じます。

その中でいろんな交流が生まれてきますし、教育長がよく言われますが、まず、自分が変わらなきゃいかんと。自分が変わることによって周りの人も変わってくるよと。それをやりながら自分たちも進化をしていくことが大事であると思います。

笑顔で挨拶しながら人と交流を図り、観光で訪れた人たちにも商店街の人たちの方から、こんにちは！ようこそ！という気軽な言葉掛けがあれば、それだけでもおもてなしは半分済んだものと思います。ここが一番大事なことと感じました。基本を大事にしていきたいものです。

周りを変えたければ、まず自分が変わること